

「第三回まなびあい勉強会」 報告レポート

アート・コミュニケーション研究センター
リサーチ・アシスタント 渡川 智子



さぬき生活文化振興財団 (<http://sanuki-lc.jp/index.html>) の事業の1つ「まなびあい勉強会」の講師として福が招聘され、講演を行った。まなびあい勉強会とは、「刺激を受けて、そこから考え、実践につなげる」ことを主軸とし、毎回講師を迎えて20人程の少人数で話し合う勉強会で、今回が3回目の実施となる。

今回の講演には、高松市内の美術館・博物館の学芸員、ボランティアの方、小中学校の教員、地域アートプロジェクトに携わっている方など本当に多様な方に参加いただいた。満員御礼の会場内は、熱意ある参加者の真剣なまなざしで溢れていた。

講演は前半・レクチャーと後半・実践の2部構成。前半は、「みる、はなす、考える、聞く」をテーマとしたレクチャーが行われた。レクチャーは美術館における鑑賞教育の現状、アートとアート作品のちがひ、意識をもって「みる」こと、京都造形芸術大学でのACOPの取り組みなど、どの分野にも繋がっていくトピックについて、しばしば笑いに包まれながら、痛快に展開していった。後半はレクチャーの内容を踏まえながら、福がナビゲーターとなり、2作品の対話型鑑賞が行われた。意識してみること・考えること、根拠つけて絵をみることに参加者は戸惑いながらも、気がつけば1時間、1つの作品について熱中して鑑賞を行っていた。

講演後には懇親会も開かれ、そこにも総勢20人近くの方が参加した。講演で質疑応答の時間が十分に取れなかった分、懇親会では参加者それぞれが抱える悩みや講演の感想、質問等を福に語る場面が多く見

られた。また、会場は香川県内のあらゆる職種の参加者の方々の交流の場ともなっており、あちらこちらで非常に熱い話で盛り上がっていた。

今回この会に福が講師として訪れ、参加者との間に学びや興味が生まれ、そしてこの場をきっかけとして、参加者同士にも様々な交流、学び、交流や情報・リソースの交換が生まれていた。「まなびあい勉強会」のコンセプトの「刺激を受けて、そこから考え、実践につなげる」にもあるように、この場で起こったコトを、それぞれがどういう形で捉え、自分自身の生活や現場につなげていくことができるか、学びからの一歩が何より重要なアクションなのだというのを改めて実感する機会となった。

講演翌日は主催者の多田さんの案内で高松市内にある高松市塩江美術館（同美術館の学芸員お2人は、講演・懇親会にも参加いただいていた）を訪問。仏生山温泉で疲れをとり、本場さぬきうどんにも舌鼓を打ち、充実の香川体験をすることができた。多田さん、参加者の皆様、本当にありがとうございました。